

Ⅲ 平城京・寺院の陶硯について

第1節 平城京の陶硯の出土傾向

これまで平城京の発掘調査は奈文研、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、大和郡山市教育委員会などが継続的におこなってきた。本書所収の陶硯資料は、奈文研による発掘調査で出土したものに限られることと、また、調査地は平城宮周辺が多いといった偏りがあり、規模にもばらつきがある点は指摘しておきたい。

先にも指摘したように、「硯」の使用実態の側面からみれば、転用硯の存在を無視することはできないが、陶硯の出土傾向が遺跡の性格に大きく関わることは言うまでもない。京域での陶硯の大きな出土傾向として、小規模な調査でも数点の陶硯が出土することもあれば、大規模な調査にも関わらず、ほとんど陶硯が出土しない場所がある点が指摘できる。

比較的まとまって陶硯が出土する場所には、有力な皇族・貴族の邸宅が挙げられる。左京三条二坊一・二・七・八坪の四町を占める長屋王邸は、先述のように出土した陶硯が長屋王家に帰属するとの確証が得られないものの、邸宅内に実務的な家政機関を持つことが明らかであることから、ここで使用されたものを含むと考えたい。長屋王邸のように比較的大規模に調査がおこなわれ、邸宅内の区画や建物配置が明らかにされた例は少ないが、正殿がある邸宅の中核部（中央内郭）からは、ほとんど陶硯が出土せず、東外郭に分布が偏る点は注目に値する。いっぽう、石組みの園池遺構がみつきり有力な皇族・貴族の離宮あるいは宅地が想定される左京三条二坊六坪（第96次⁽¹⁾）や少なくとも一坪以上の規模の宅地が想定される左京三条二坊十五坪（第83・86次⁽²⁾）では、広範囲にわたって発掘調査行われているものの、ほとんど陶硯が出土していない。有力者の邸宅でも、より実務的な空間に出土が偏ることが指摘できる。

こういった分布の偏りは平城宮や寺院でも確認できる。平城宮においては太極殿院、朝堂院といった中核部分から陶硯が出土することは少なく、より実務的な空間である周辺の官衙域に分布が偏ることがすでに指摘されている⁽³⁾。また、寺院においても中核伽藍から陶硯が出土することは少ない。これは他の遺物の出土状況にもみられることで、陶硯の使用、廃棄の過程を考えれば、容易に肯首できよう。

次に陶硯が多く出土する遺跡として宮外官衙や官営工房などの機関が挙げられる。長屋王邸に西接する左京三条一坊七・十五・十六坪（第118・8・231・242・8・266・314・7次）は、墨書土器、漆紙文書などの遺物や遺構から、大学寮の可能性が指摘されている⁽⁴⁾。出土した陶硯は蹄脚円面硯を含むなど、官衙的な様相が強いともいえる。また、右京八条三坊十四・十五坪（第168・179次）は西市に近接する工房で、先述のとおり出土遺物の内容から官営工房の可能性が指摘されている。左京七条一坊十五・十六坪のSD6400（第252・253次）や、東市の北側にあたる左京八条三坊十五・十六坪の調査の東堀河SD1300（第93・94次）でも鑄造関連の遺物が相伴しており、工房に関連する可能性がある。これらの陶硯は工房の生産管理に関わる場面で使用されていたことを示すものであろう。平城宮内においても工房関連の遺物と相伴して陶硯が出土しており、同様の傾向をみることができる。

それでは一般的な庶民の宅地では陶硯が出土することがまれであるのかといった点については、転用硯を視野に入れた議論が今後の課題であろう。

第2節 寺院の陶硯の出土傾向

本書では便宜的に各寺院の寺域内より出土した陶硯を、寺院の資料として扱った。しかし、奈良時代後半になって造営された西大寺、西隆寺では寺院造営以前の遺構がみつかり、これらの遺構から出土した陶硯も含まれる。本来、これらは平城京域の資料として扱うべきであるが、個々の遺物について、寺院との関連を見極めることは難しいため、寺院の資料とせざるをえなかった。また、法隆寺の資料では7世紀代にさかのぼる遺構から出土した陶硯もある。よって、これらの資料体が奈良時代の寺院が有する陶硯の実態を、どれほど反映しているのかという点については注意を要するが、前節でも述べたように伽藍の中樞部分では陶硯の出土が少ないなど、一定の傾向を指摘することはできる。

寺院の資料の約3分の1は、興福寺一乗院の宸殿下層下土坑より出土した資料である。共伴する土器が奈良時代末から長岡京期を中心とすることから、寺院のもつ陶硯のあり方だけでなく、この時期の陶硯の型式を考えるうえで重要な一括資料である。

第3節 平城京・寺院の陶硯の種類

平城京域から出土した陶硯の全体的な数量としては、平城宮跡が2005年度までの調査面積約39万㎡で536点の出土に対し、平城京域が約22万㎡で372点の出土をみており、単純な密度計算からすると、平城宮では約700㎡の調査で1点、京では約600㎡で1点の出土ということになり、平城宮のあり方よりも多い数値がみえてくる。すでに述べたように、平城宮内の調査でも陶硯の出土は大極殿院地区といった中樞部分に少なく、実務的な官衙域に偏る傾向があるため、これまで調査してきた場所にも左右されるが、この京域での数字を積極的に評価するならば、奈良時代における陶硯の普及を物語る値と言えよう。ちなみに寺院では約400㎡につき1点の計算になる。

内容に目を移すと、京域では平城宮に比べ蹄脚円面硯の比率が低いことが指摘できる。宮の蹄脚円面硯、圈足円面硯に占める割合が約9割を占めるのに対し、京は約8割と、宮に比べやや雑多な内容をもつ傾向が指摘できる。また、寺院は円面硯が8割近くを占めるが、蹄脚円面硯はきわめて少ないことと、大型の圈足円面硯が少ないことが指摘できる(図8)。図7から京、

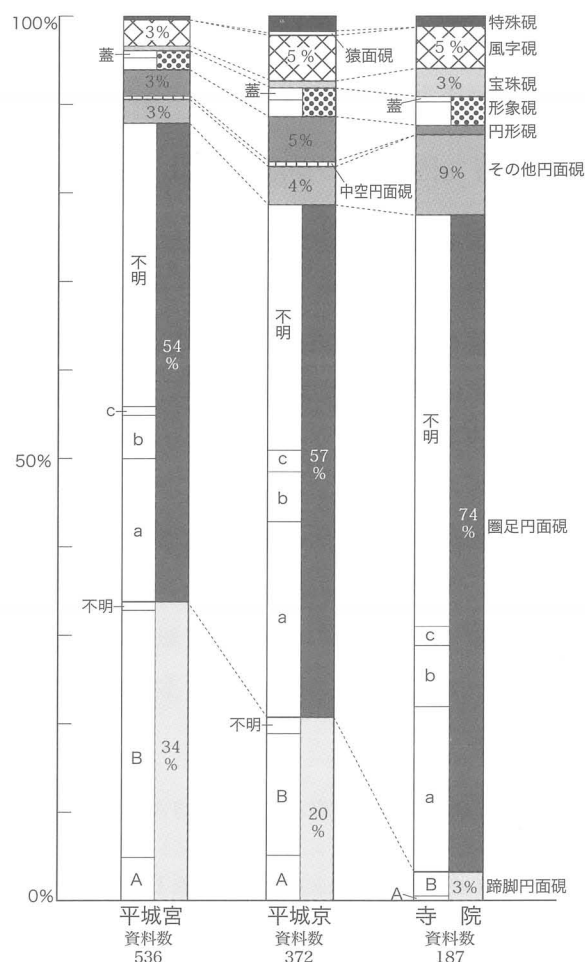


図7 宮・京・寺院の陶硯の種類比

寺院ともに風字硯が多いように読み取れるが、宮の資料に比べて黑色土器などの平安時代にくだる陶硯を含むことが挙げられる。

平城宮の資料では見受けられなかったものとして、京の資料には短い蹄脚状の獣脚をもち、いわゆる百足硯に類する円面硯（237）、圈足円面硯に蹄脚円面硯を模倣したような珠文を持つもの（41・99）、輪状高台の円形硯に脚部の剥離痕をもつもの（50・232）、羊形の形象硯（82・142）、奈良三彩の亀形硯蓋（348・349・350）などがある。

寺院の資料には、特筆すべきものとして、硯部内面に「廣大」とヘラ描きするもの（445）、蹄脚円面硯の外堤部外面に蓮華様の戯画を施すもの（583）、硯面は円形、外堤を八角形につくるもの（541）、筆立て状の穿孔をもつもの（572）などがある。また、一乗院では硯部内面を朱用硯に転用するもの（454）があり、同じ土坑から朱が付着する須恵器の転用硯も多数出土しており、墨と朱の使い分けの実態を示す好例である。

第4節 円面硯の種類・法量・焼成

圈足円面硯の硯面の形状による比率は宮、京、寺院を通じて、ほぼ同じ割合で存在し、奈良時代の圈足円面硯の実態を反映しているのではないと思われる（図7）。京・寺院出土の円面硯の種類と外堤径の関係をみると（図8）、概してa類は小型のものから大型のものまで見られるが、b類、c類に大型のものはみられない傾向がわかる。これは7世紀代の円面硯がa類を中心とすることから考えても、b、c類が奈良時代になって中型～小型の圈足円面硯に採用された硯面の形態であることを反映しているであろう。

圈足円面硯の硯面形状・法量と焼成方法の関係をみると、硯面形状と焼成方法に関連性は見受けられないが、大型の圈足円面硯aには正置焼成が目立つ。また、本書に集録した蹄脚円面硯については、A類が倒置焼成であるのに対し、B類はいずれも正置焼成である。平城宮の資料をみても、B類は正置焼成が一般的であり、硯面を覆う重焼きの痕跡から蓋の有無など、陶硯の産地を含めた検討が今後の課題である。

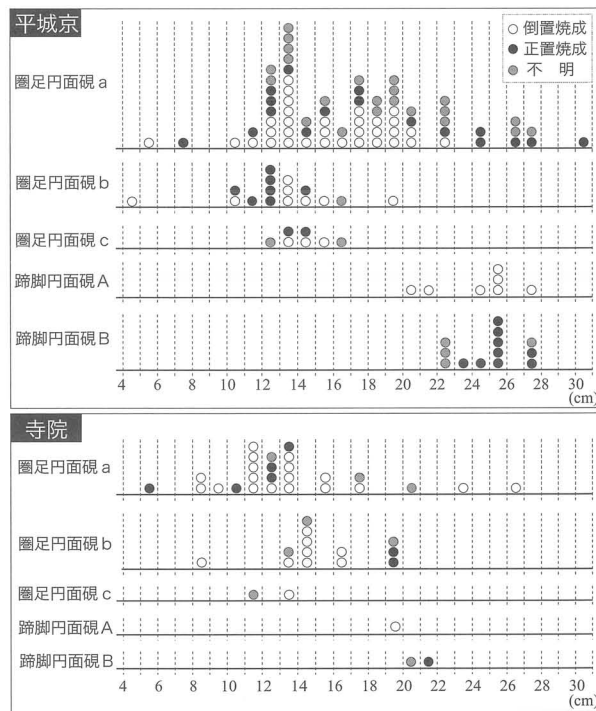


図8 円面硯の種類と外堤径

- (1) 奈文研1986『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』（学報44）
- (2) 奈文研1975『平城京左京三條二坊』（学報25）
- (3) 奈文研2006『平城京出土陶硯集成Ⅰ－平城宮跡－』（史料77）
- (4) 奈文研1993『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』
奈文研1995『平城京左京三条一坊十四坪発掘調査報告』
奈文研2005『平城京漆紙文書一』（史料69）